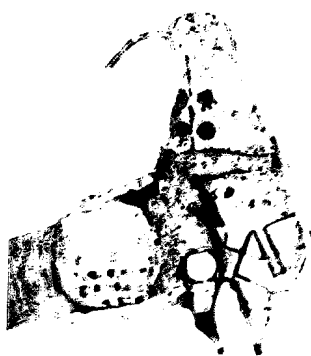


山頂の椅子

澤野久雄



新潮社

山頂の椅子

一九六七年八月五日 印刷

一九六七年八月一〇日 発行

定価 三九〇円

著者 澤野久雄

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(280)一一二一
振替東京八〇八番

印刷 図書印刷株式会社

製本 新宿加藤製本所



目次

山頂の椅子

五

孤客

一七

晩年の石

一五

あとがき

二〇

澤野久雄創作集／

山頂の椅子

裝幀水船六洲

山頂の椅子

一

不意に落ちかかって来た幸運が、その人の一生を狂わしてしまうという事例は、二十世紀の後半に属する今日でも、決して少いことではない。そこには人間の魂の脆弱さとか不明とかいうものが、かくしようもなく露呈されるわけだが、こういう現象が、必ずしも無知蒙昧の徒の上だけに起きるのではないというところに、いわば人間の喜劇は展開するのである。

いや、——天堂幸之助という男の一生が果して狂っていたか、という質問を受けたら、私は一応、返答に窮しななければならない。なぜなら、彼は今日もまた立派な社会的地位を持ちつつづけている。多くの人の尊敬を、集めている。巨大な富を所有しているとはいえないが、その地位にふさわしい生活を維持するに足るだけの、収入は確保されている。にもかかわらず、何人かの友人たちは、彼を哀れに思っているのである。実は、そう思う人たちだけが、正確に彼の人間を見抜いているわけだが、しかし彼らはすでに天堂幸之助の身辺から、遠く離れてしまっている。今日、彼には一人の友人もいないと言っている。そして、天堂幸之助をそのような場所に追い込んだのが、あの、世界的に有名なフランスの一つの賞の仕業だ

と言ったら、案外、願ってくれる人は多いのではないか。すると、彼を語るには、その賞が贈られると決定した日のことから始めるのが至当であろう。

一九四×年十一月×日。

彼は京都の大学の研究室にいて、ひっきりなしにかかって来る電話のために、五分とつづけて椅子に坐っていることが出来なくなった。

最初にかかって来たのは、東京のS新聞社からであった。入口のドアに近い、小さなデスクに向っていた秘書の青木圭子が、

「先生、S新聞社からお電話です。」

と声をかけて来た時、天堂は、ふむ？ というようなふくみ声でふり返り、よし、と言うと椅子を立った。部屋を横切り、小さなデスクに歩み寄る。が、電話の中の声が、

「先生、Z賞をおもらいになるそうで……。」

と言った時、

「いや、僕は知りませんよ。」

知らないことは、なかった。フランスの大使館から、半月ほど前、密かな予告は受けていた。しかしそれも、あなたは有力です、というぐらいのものであった。あてに出来ることではなかった。なにしろそれは、世界じゅうで一番有名な賞なのであった。何十年来、最も価値ある仕事をした学者、芸術家、あるいは平和のために働いた人たちに、与えられて来たも

のである。今までの受賞者の多くは、日本の小学生でさえ、名前を知っているような人たちがばかりであった。天堂は、まだ自分をその人たちと同列に置いて見るほど、うぬぼれて居はしなかった。大体、日本人でその賞をもらった人は、その日までに一人もいなかったのである。

新聞記者は、確かな情報が入りました、と言った。が、天堂は相手にしなかった。すると五分も経たぬ内に、今度はフランス大使館から、最終的決定を知らせて来た。それからまた、別の新聞社からの電話を受けた。

彼は急に気むずかしい顔になり、自分の卓子へ帰りかけた。が、彼のために僅かに場所をゆずって、部屋の一方の壁を埋める書架に背をよせるようにして立っている圭子を見ると、「今日は電話が多いかもしれない。直接、僕のデスクへ繋ぐように言い給え。」

彼のデスクにも電話機は置いてあったが、彼は交換台に命じて、いつもそれを片電話にして置いたものだ。つまり、自分から掛ける時には使う。が、かかって来る電話は、すべて秘書のデスクに繋がるようにしていたのである。秘書は改めて交換台を呼び、今日に限り、天堂への電話は直接彼のデスクへ繋ぐように頼んだ。と、その瞬間から、電話のベルは鳴りつ放しになった。

新聞社、放送局、それに彼が現在そこに坐っている大学の、各学部長室。電話の声は、すべて彼を祝福した。学者としての名誉を、讃えた。讃えながら、昂奮している声もある。怒鳴るような、口調もあった。彼は低い、抑えた声で応答しながら、ふと、熔鉱炉の中で熱しられ、熔けてゆく鉱物の細片を目に描くのだった。あるいは、何万光年という距離にある恒

星が、突然、光度を増しはじめる状態を描いて見た。受話器を置くと、ベルはまたすぐに鳴った。

青木圭子は、電話のとりつぎがなくなったことで、突然襲って来かかった多忙から、解放されるはずであった。が、厭厭なく耳に入って来る天堂の声を聞いている内に、彼女は自分自身までが、ゆすぶられているような錯覚を起しはじめるのである。現在自分の坐っている部屋の中に、思いもよらない異変が起っていると気づくのである。いつも、この部屋にいる限り、寡黙な二十二歳の娘は、口を閉ざしていることがどうにも困難になった。

「先生。何か大変おめでたいことが……？」

「ふむ？」

この応答の仕方は、天堂の昔からの習癖であった。おだやかな目で、落ちついて相手を見る。その間に、自分の出方を考える。

実は、日本に稀なこのすぐれた頭脳の持主が、そのような神経の使い方をすることは、なんとも無益な浪費なのである。しかし、いまや第二の天性になってしまっているこの姿勢は、おそらく一介の大学教授にとって、生涯に二度とはないであろう輝かしい時に際会しながら、年若い一人の秘書に対してさえ狂いもなく用意されるのであった。

「まあ、お目出たいこと、と言ってもいいでしょう。世俗的にはね。」

彼は、自分の胸が、丸太で叩かれるように鳴りはじめているのを感じたのだった。その自覚は、彼に羞恥を覚えさせた。

「しかしね、学問をする者にとっては、学問が一步でも前進することが喜びなんですよ。いままでやって来た研究に賞が与えられるということは、その人の学問自体にはなんの關係もない……」

もしここで、自由な時間が三十分だけ与えられたら、彼はこの際、世間に対してとるべき姿勢について、更に充分に考えようとしたであろう。そういう苦勞がどんなに俗惡なことであるかも知れぬが、———そういうえばその日まで、世間とは全く没交渉といつても差支えない彼の生活ぶりであった。

ところが幸か不幸か、彼には時間的余裕が与えられなかった。学部長が、真先にこの部屋に走り込んで来た。同じ学部の教授が、助教授が、なだれ込んで来た。次には、新聞記者が、わめきながら侵入して来た。ラジオ局のニュース班が、テープ・レコーダーをかかえて入って来る。写真のフラッシュは、稲妻のようにこの部屋を割いた。研究室は、———いままで厚い壁によって世俗から隔絶されていた部屋は、———突然、壁をはぎとられ、天井をむしりとられ、彼自身が裸のまま、初冬の風の中に晒されてしまうようであった。そうだ。世にまれな榮譽をその頭上に戴いたと思った時、彼は羽をむしられた一羽の鶏になってしまっていたのである。そういう事実を、彼はいくらかでも意識したであろうか。

夕方の五時。彼は漸く、自分の部屋を逃れ出した。大学の車で送られて、家に帰った。家は銀閣寺に近い、住宅街の一劃にあった。が、その家もすでに、新聞社や放送局の車できこまれてしまっていた。彼は不意に、二十年前に見た踊りの舞台を思い出すのだった。客

席は眞の闇であつた。いくつかのライトが、舞台の小さな一部分だけを照し出していた。そこに一人の、優れた踊り手の肉体がある。いや、その時、劇場の中に存在しているものは、その踊り手だけなのである。そしていま、踊り手は天堂自身の顔を持っていた。

その日、天堂家の電話は、午後から深夜まで鳴り通しであつた。新聞記者と放送局員とは、応接間から次の部屋までを占拠した。彼は、幾度も同じことを聞かれ、同じことを答えねばならなかつた。中でも一番困難だつたことは、彼の学問の内容を、やさしく簡単に喋つてほしいと注文されることであつた。

「そんな注文をされても、僕が学生時代から、長いこと研究して来た問題なんですよ。十年も二十年もかかつて到達した場所を、五分や十分で喋れと言われても……。」

中には、賞金をどう使う積りかと、ぶしつけな質問を投げかけて来る男もあつた。彼は答へなかつた。仏貨で十何万フランという額は、円に換算すると千何百万円になるはずであつた。まだ、第二次世界大戦が終つて何年も経つてはいず、日本では物価が、日毎に暴騰している時代であつた。人びとは、悲鳴をあげている。天堂の家でも、大学から受けとる給料などは、右から左へなくなつてしまつていた。しかし千何百万という金額は、当時としては天文学的数字に近かつたのである。少くとも大学の教師や、一般の俸給生活者にとつては。

天堂家に静かさがよみがえて来たのは、その夜半、二時を過ぎてからであつた。子供たちは幸之助に挨拶をし、いくらかよそよそしい表情でそれぞれの部屋へ引上げて行つた。食堂で、彼ははじめて妻と向ひ合つた。妻の勢子は、花模様のひとこしの衾を着、きちんと帯

をしめていた。

「やっと二人になりましたによって……改めておめでとう、を言わせてもらいますわ。貴方という方は、いくらでも立派な仕事をしてくれはる方だと思つたが、やっぱり……。」
そこまで言つと、勢子は涙ぐんだ。

「いや、ありがとう。これで僕も、君にいくらか恩返しができる。」

天堂はまた、落ちついた口調で答えた。結婚生活十何年、いつも妻には圧倒されて来た男である。

——こいつは今日まで、自分の手で俺を生かしているような顔をしていやがった。しかし、今日からはちがうぞ。

彼のその夜の喜びは、せんじつめればそのひとことに集約されたかもしれない。養子である。薄給である。いや結婚した当時は、無収入でさえあった。戦争中は、食料をうることさえ並大抵ではなかった。そういう状態をくぐり抜けて来られたのは、妻の奮闘と、その実家の財力のおかげであった。それは有難いことにはちがひなかった。が、妻に対する一種のコムプレックスは、年ごとに彼の中に、不透明な沈澱物のように蓄積されていたのである。彼は、妻が改めて用意した盃を手にながら、俺は解放されるぞ、と、腹の中で叫んでいた。

見やがれ、この高慢ちきな女め！ 思い知れ、このお化け！

いや、勢子は美しい容姿をしていた。「お化け」などと思つたことは、今日までに一度もなかったにかかわらず、彼はひそかにそう毒づくのであった。しかも彼は、そういう激しいも

のを、少しも顔に見せはしなかった。ただ、自分自身で頷きながら、俺は日本で、ただ一人の存在なのだ。俺にとってこんな女は、塵芥と同じだ。こうやって向い合っている二人の人間の間には、地球とエリダヌス座のイプシロン星ほどの距離がある。

もしこれが、若くて愛し合っている夫婦であつたなら、手を取り合い、肩を抱き合つて泣いたかもしれない。素朴な愛というものは、いつも見る目に美しいものである。しかし、天堂ももう四十歳を越えている。それほど甘くも、ロマンティックでもなかった。むしろ今日までに妻から与えられたものに、——それは物質的なものについてだけ言うのではない、——利子をつけて叩き返してやることも出来ると思うことだけが、妻に対するその夜の偽りのない気持であつた。美女である、才女である、しかも人をそらさない。妻に対するそういう周囲の評価が、彼の栄誉の前にははかなく崩壊するだろうという予感だけが、彼を寛大にしていたのである。

「とにかく大変な一日だった。」

寝室へ入る時、彼はそう言つて笑つた。

「さあ、明日からはまたもとの学者だ。」

しかし、宇宙物理学の分野では、何百光年もの遠い距離を計算しうる天堂幸之助も、実社会では僅か数時間先の測定に誤りを犯した。

翌日は、早朝から電話が鳴りつづけた。祝電が、束になって届いて来た。朝食の途中から、客は襲つて来る。ラジオのニュースで聞きました。新聞で拝見しました。知人が、何年も音